

近世蔵骨器の一例 —大森町本郷家墓地の事例—

高橋 学

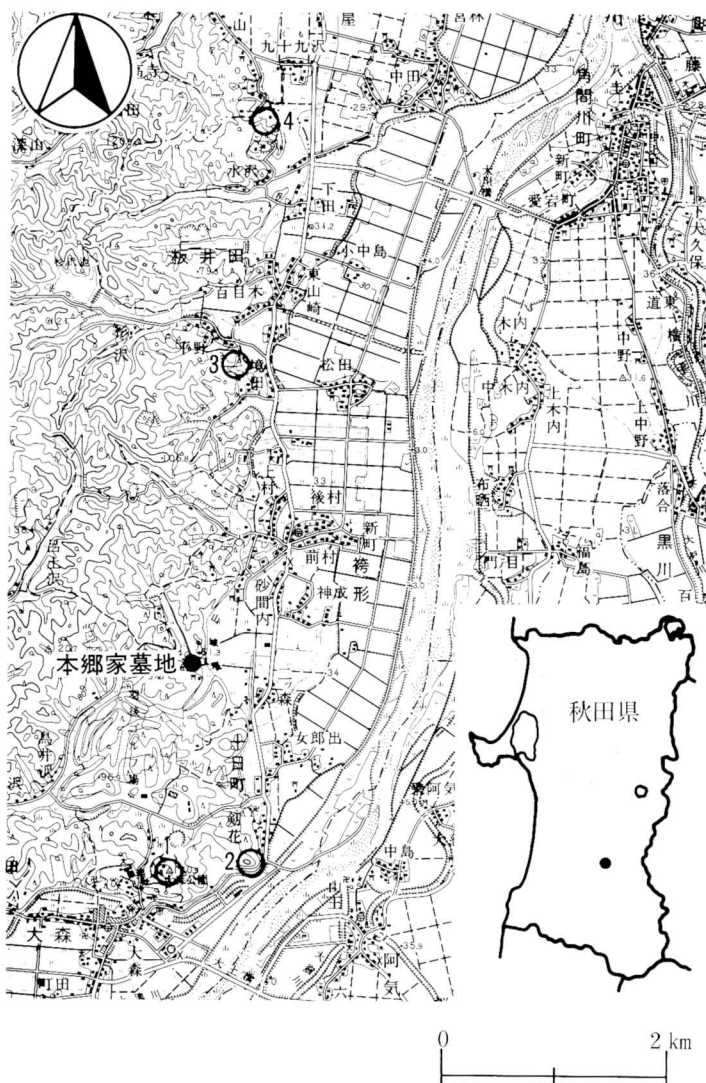
はじめに

ここに報告する資料は、秋田県平鹿郡大森町袴形に所在する本郷家墓地の改葬に伴い出土した蔵骨器（陶製の大甕）である。蔵骨器は、無銘の墓石（墓塔）の下に埋められており、この中には相当量の火葬骨が入っていたようである。本情報は、1996年10月9日、同墓の改葬主である本郷廣氏より秋田県埋蔵文化財センターに寄せられたもので、発掘調査の事例ではないが、近世に属する蔵骨器の確認例は極めて少なく、貴重な検出資料として同家の諒承を得て紹介するものである。

1. 墓地の位置と周辺の遺跡

本郷家墓地は、大森町袴形字新井山沢にあり、同家宅（袴形字砂間内）とは約1 km離れた地点に位置している。ここは寺院附属の墓地ではなく、雑木林の一角に本郷家一族代々の墓標が整然と配されている。墓地は、横手盆地の西辺を画する出羽山地の東端、丘陵地最縁辺に立地し、東向きの緩斜面を整地して構築されている。標高は約40mである。この丘陵縁辺部と沖積面との境界域には、雄物川を取水源とする山城堰（五ヶ村堰＝延宝4年（1676年）完工）が流れており、本流雄物川は、墓地の東約2 kmを北流している。

墓地近辺に所在する周知の遺跡は、次のとおりである。南約2 kmに位置する大森城跡（第1図1）は、『秋田県の中世城館』によると、「文明年間（1469～86年）小野寺道高が築城し、慶長6年（1601年）小野寺宗家の改易により当城最後の城主小野寺康道も津和野藩主坂崎氏政に



第1図 墓地の位置と周辺の遺跡

預けられ、元和6年(1620年)頃廃城と伝えられる」^(註1)とある。またここから東約500mには、劔花山遺跡(同2)があり、大森城の出曲輪^{くるわ}ともされる。同遺跡では大正末年～昭和初年頃、珠洲系陶器の波状文壺に片口鉢を蓋にした状態で発見され、壺の中には直径2.4cmの水晶玉が入れられていた。陶器の年代は13世紀初頭を前後する時期である^(註2)。一方、本墓地の北約2.7kmには、五庵屋館跡(同3)が所在するが、「昭和28年頃耕地整理の際付近の水田から埋れ木が出土した以外に、何ら口承も伝わら^(註3)ない遺跡(館跡)とされる。

発掘調査が行われた遺跡としては、昭和62年秋田自動車道建設に伴い調査された下田遺跡(同4)が挙げられよう^(註4)。同遺跡は墓地の北約5km位置し、丘陵東端部(標高40m前後)に立地する。調査の結果、縄文時代と平安時代の集落跡であることが明らかとなった。このうち縄文時代では前期初頭の尖底土器や土坑(陥し穴)、中期末の北陸系土器(大杉谷式)、晩期の住居跡、土坑などが発見されている。平安時代では堅穴住居跡、建物跡、土坑などが検出され、9世紀後半から11世紀代に存続したことが確かめられている。平安期遺物のうち、出土例の少ないものとして、土師器の羽釜(鐏釜)、青銅製の和鏡(端花双鸞八稜鏡^{ずいかそうらん})がある。和鏡は11世紀代の製作のようである。

一方、近世の資料としては石造物がある。本墓地に隣接して数基の石碑が建てられており、うち一基は、燈明型の円柱形碑である^(註5)(写真5)。三面に刻字が認められ、正面に梵字、その下に「當寺峰位」、右側面に「天保三壬辰三月 六世法印龍仙」、左側面に「七世法印快門」とある。天保3年は西暦1832年である。

2. 改葬時の状況と蔵骨器・墓塔

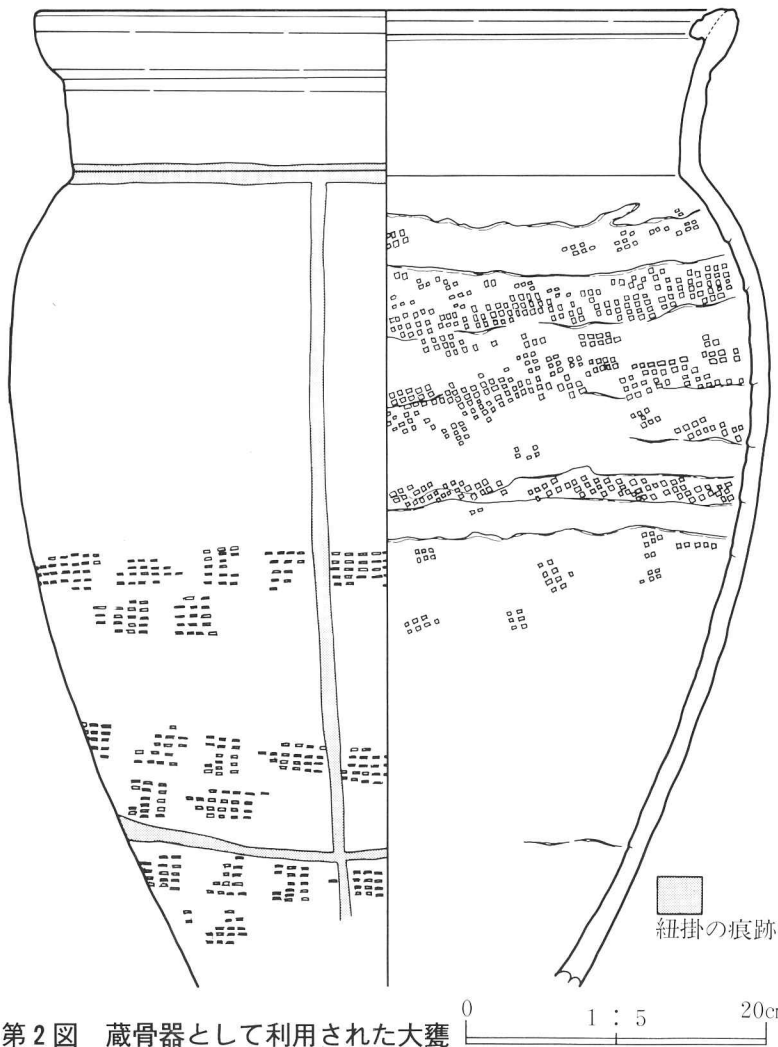
本郷家墓地は、5基の墓石がほぼ南北方向一列に並ぶ。火葬蔵骨器を伴う墓石は、最も南に位置し、後で述べるように供養塔のような形態の墓塔であり、文字等の彫り込みはない。他の4基は現在でも普遍的に認められる角柱形の墓石であり、南から二代目、三代目、四代目、五代目と記され、それぞれに法名等が刻まれている。これら4基の地下には蔵骨器はなく、掘り下げの結果、一部で木棺の残欠・釘や非火葬骨が認められたことから、棺桶に納めた土葬と判断される。また寛永通寶と思われる銭貨も10枚以上見つかり、棺に副葬した品であろう。では問題の蔵骨器・墓塔、すなわち本郷家初代あるいはそれ以前と目される資料について詳しく観察してみたい。

(1) 蔵骨器

墓石の下に位置する大甕は陶製であり、底部を意図的に打ち欠いた後に正立状態で埋めている。埋設にあたっては、甕と周囲の地山粘土が接するように観察されたことから、あらかじめ大きな穴を掘り甕を納めた後に周囲に土を戻す(裏込め)方法ではなく、甕より僅かに大きい穴を穿ちそこに納めているようである。また甕の上端(口唇部)は、地表面とほぼ同一面にあり、墓石下端と接する位置にあたる(写真7参照)。

甕(第2図)は、現存高66cm、口径47.2cmと大型で重量感があり、最大径(50.7cm)を胴中央より上の肩部におく。口縁部は、頸部から外反気味に立ち上がり、口縁上部で僅かな屈曲をもたせた後、器厚をやや増して口唇に至る。その口唇部は内側に折り曲げ肥厚させている。器厚は胴部で1.1～1.7cm、口唇部では3.2cm前後である。推定される容積は約82リットルあり、4斗甕を意図して作られたものか。また器面に残された痕跡より、この大甕の製作方法がある程度復元できる。

まず幅4cm前後の粘土紐を底部から輪積みあるいは巻き上げにして大まかな形を作り上げる。内外面には格子状のタタキ痕・アテ具痕が観察できることから、叩き成形の手法による製品であることが分かる。もちろん大形のものであるから、底部から口縁部まで一気に粘土紐を積み上げるのではなく、おそらく数段積み

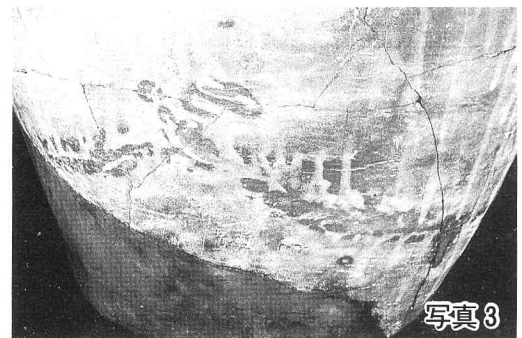
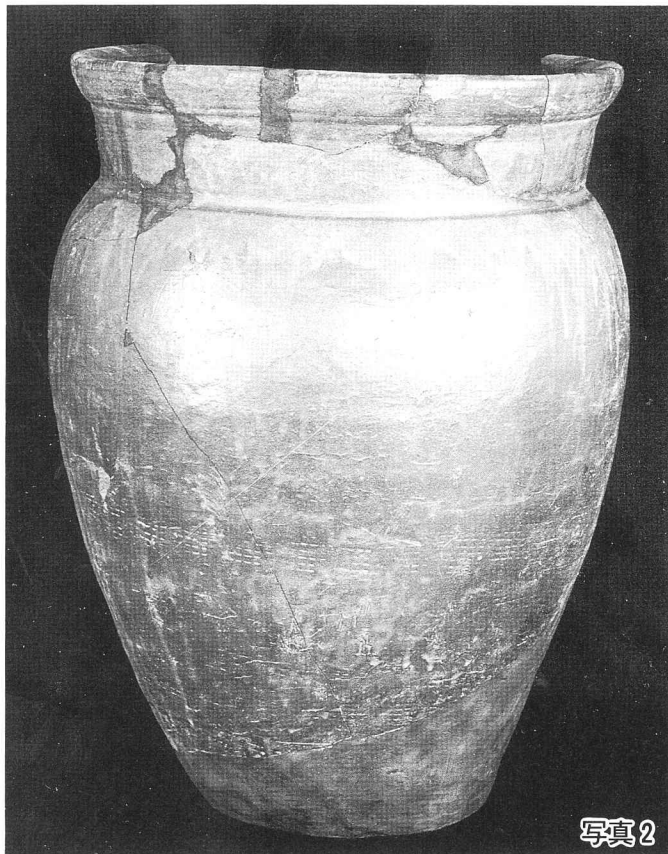
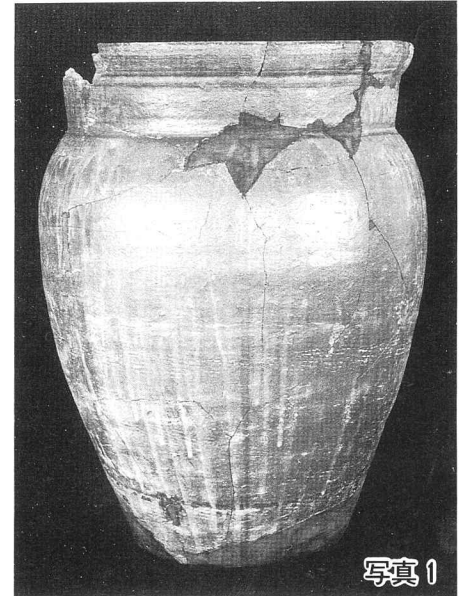


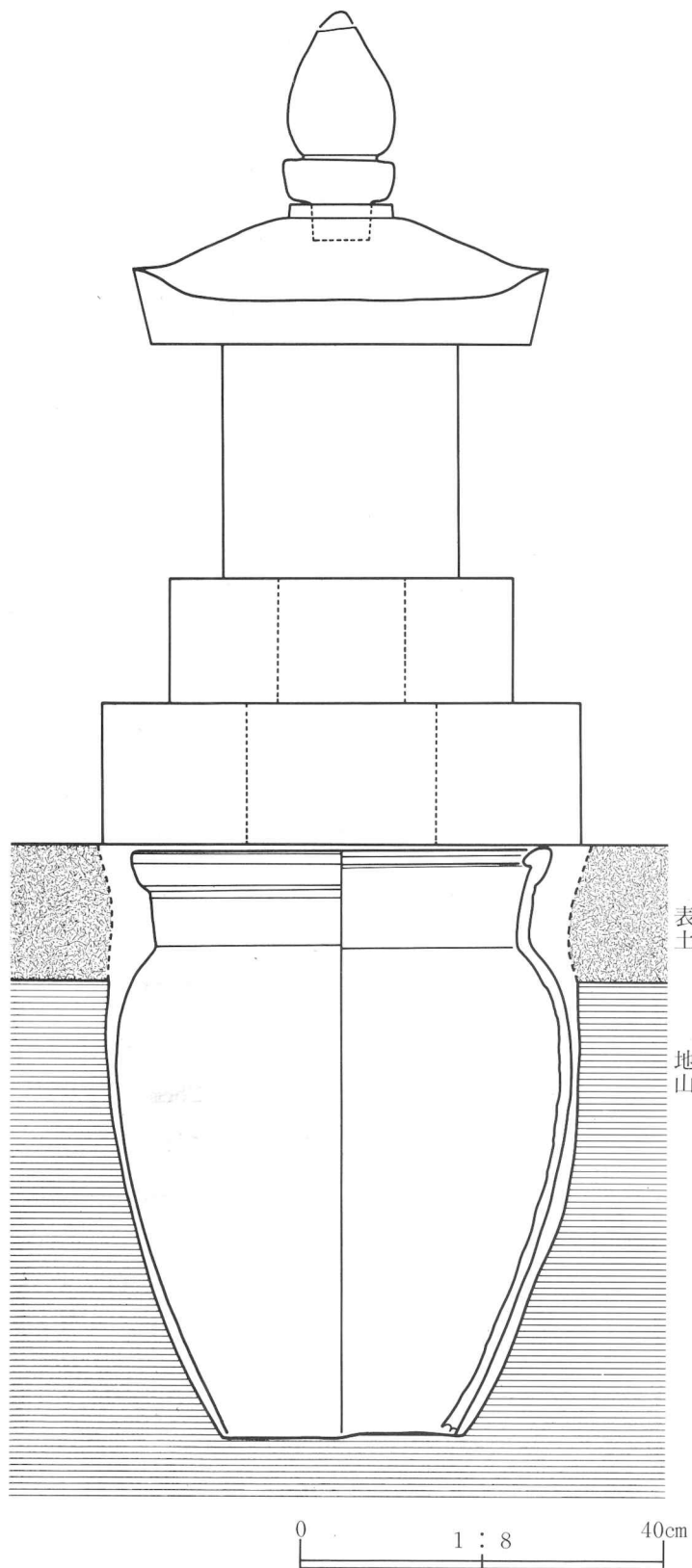
第2図 蔵骨器として利用された大甕

写真1～4 蔵骨器

写真3 胴下半部での紐結束状況

写真4 内面の状況





第3図 墓塔と蔵骨器(断面投影図)

写真5 円柱形碑(中央)

写真6 墓塔(改装後)

写真7 墓塔最下層除去後の

蔵骨器確認状況(本郷廣氏撮影)



写真5

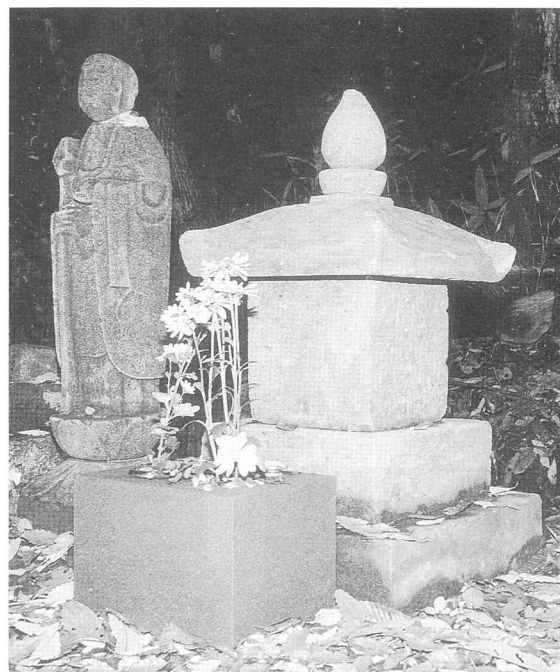


写真6



写真7

上げては内外より叩き締め、また粘土紐を積み上げては叩き締める工程の繰り返しと推測できる。そのタタキの工具は、内外面で異なり、外面では、最小単位としての格子は、長さ7mm、幅2mmの長方形、内面は一辺約4mmの方形を示す。胴上半〜口縁部は、横筋状の連続した擦痕が見られることから回転台（ロクロ）を利用したナデ整形がなされたと判断される。

器面・素地は鈍く光沢を放つ赤褐色を呈するが、口縁側より流し掛けられた濁った淡黄色の釉薬が内外面ほぼ全体を覆っており、くすんだ赤褐色に見える。釉薬は部分的・直線的に剥落（第2図網点部分）しているが、これは紐掛の跡と思われ、この部分はまさに緋色を示している。紐掛跡（紐幅0.8〜1.5cmか）は、頸部（屈曲部）及び胴下半分をそれぞれ一周させ、両者を縦方向四方に連絡する。胴下半のうち2箇所では縦方向の紐とを結んだ痕跡（写真3）が明瞭に見られる。これは、施釉してから完全に乾燥する前に甕を紐掛して窯詰め作業に入り、紐を解くことなく焼成した結果と推測される。^{（註6）}

蔵骨器としての本大甕の特徴は、底部を打ち欠いて埋設していることである。遺体・遺骨を納める棺の底部に打ち欠きあるいは孔を穿つ例は、縄文時代前期の深鉢形土器を利用した土器棺を始期として以後断続的に後世に受け継がれていく。その意味するところは、信仰的な意義づけと、実用的な防湿であるという二説が存在する。^{（註7）}

（2）墓塔

墓石は、供養塔である宝塔を簡略化させた形態であり、ここでは墓塔としておく。本墓塔（第3図）は、先端の一部が欠落しているが、高さ93cmで五層構造を示している。各層には文字等の刻み込みは一切ない。墓石表面は、風化によりザラザラしており幾分荒れた様を示している（写真6）。色調は白味がかった灰色あるいは淡い緑灰色を呈し、石質は長石などの鉱物を取り込んだ安山岩と思われる。

墓塔各層の法量と形状は次のとおりである。最上層の擬宝珠は、高さ21.5cm（推定）、最大径12.3cmである。二層目の笠部は、長さ・幅とも46cm、高さ15.5cmで四隅がやや上方に反る。上面中央には内径6.5cm、深さ4cmの盲孔が穿たれており、上部の擬宝珠を受ける。三層目は、長さ・幅・高さともに26cmの立方体をなしている。四層目は長さ・幅38cm、高さ14cmであり、中央に径14cmの略円形の削り抜きが認められる。最下層は長さ・幅53cm、高さ16cmで、中央に一辺21cmの略方形の削り抜きがある。三・四層に見られる削り抜きの存在は、火葬骨を追葬できるように墓塔を製作したものであり、納骨堂としての性格をもっていたと思われる。

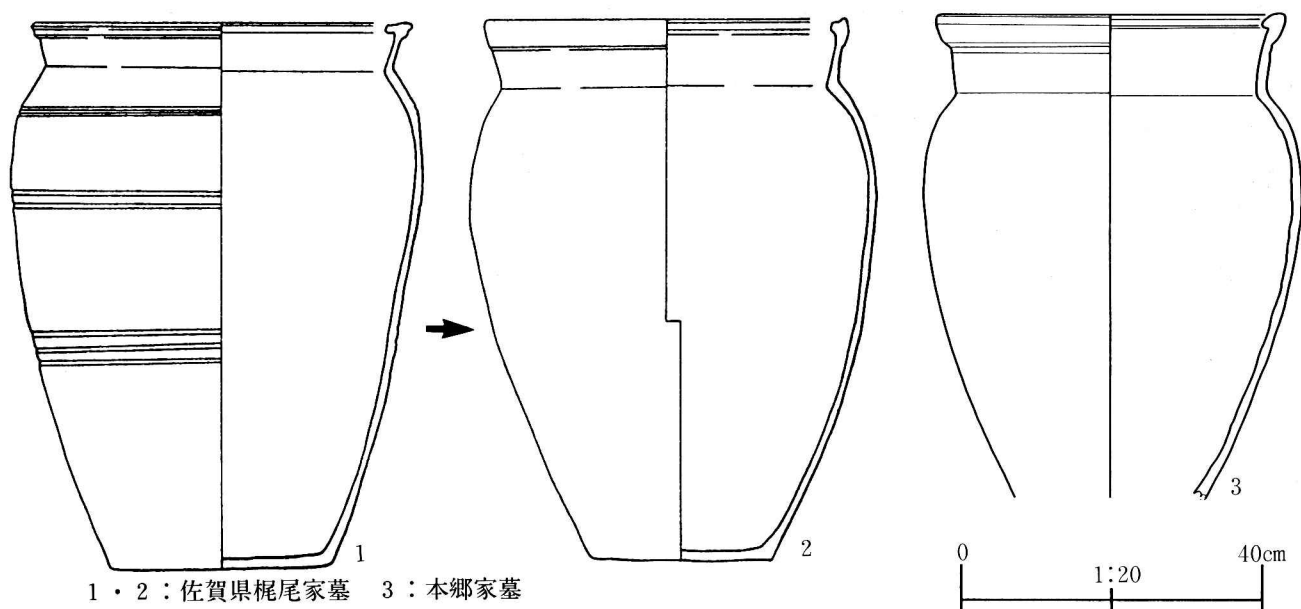
3. 火葬蔵骨器の埋設時期

蔵骨器の上に置かれた墓塔は、前述のように無銘であり、ここから蔵骨器の埋設年代は明らかにできない。そこで、本項では大甕の製作年代と本郷家の系譜の2つの面からその時期について探ってみる。

（1）大甕の産地と製作年代

蔵骨器として使用された大甕は、佐賀県立九州陶磁文化館（有田町）の大橋康二氏に写真による同定をお願いしたところ、「肥前陶器であり、普通唐津焼と呼ばれているもの」と判明した。その製作年代は、明確ではないとしながら、「17世紀後半〜18世紀前半」との回答もいただいた。

一方、その類例は多くはないものの、該期の唐津焼大甕を埋設する墓地での事例を調べると、18世紀初頭を画期としてその前後では特に口縁・口唇部の形状に変化が認められる。^{（註8）}すなわち第4図1は元禄10年（1697年）の没年代が明らかな埋葬甕（佐賀県多久市梶尾家六代明全墓）であり、口縁部が内外に発達した

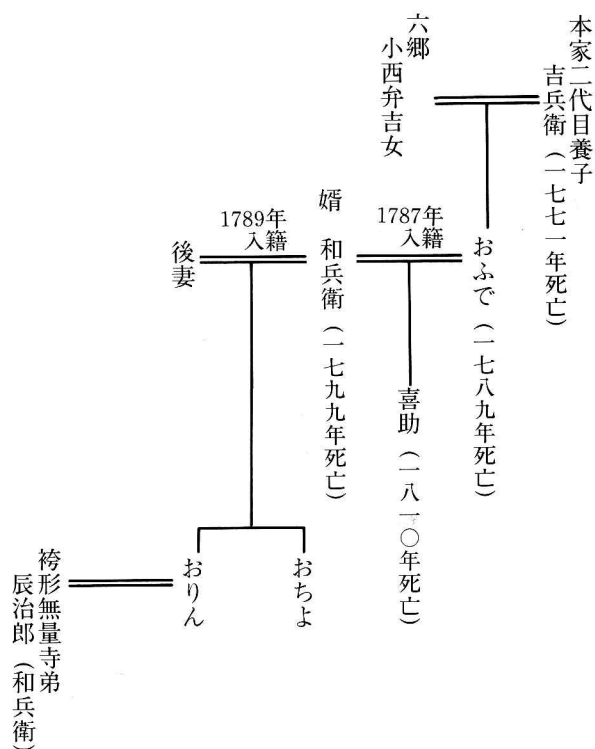


第4図 墓地埋葬の肥前産大甕

T字形を呈する。この資料は17世紀後半～末の大甕のあり方を示している。また同2は、その妻の埋葬甕であり、口唇部は内側が肥厚し玉縁状をなす。明全妻の没年は不明であるが、墓穴の重複関係から明全より後であることが明らかだそうである。このことから2の甕を18世紀前半と推定できよう。本郷家墓地の蔵骨器（同3）は、まさに後者の甕の形態に酷似する。よって本例を18世紀前半期の製作と見たい。この時期、すなわち玉縁状の口縁部をもつ大甕の登場は、「それを契機として大量生産の体制が整い、販路も急速に拡大していった」^(註9)ようである。肥前産の大甕は、石甕、飯胴甕、押川甕などと呼ばれ、「飲料水や米麦の貯蔵容器、味噌・酒類の醸造容器、肥甕や埋葬用の死^(註10)人甕」として使用されていたが、現在はその伝統的な技法は絶えてしまった。^(註11)

（2）本郷家の系譜

本郷家の系譜については、次のようにまとめることができる。袴形の本郷家は、角間川村（現在の大曲市角間川町）で代々食糧雑貨商として財をなした豪商本郷家の分家にあたる。本家8代目本郷太郎氏が著した『本郷家七代物語』^(註12)によれば、本家2代目の養子吉兵衛の孫である「おりん」は、袴形村の法印無量寺の実弟辰治郎へ嫁した。そして、辰治郎は、名を和兵衛と改めて、この家を当家の分家として、喜助等の供養をさせることにした」と記されている。分家とした時期は明確ではないが、おりんの両親の入籍は寛政元年（1789年）であることが「本郷家系譜」^(註13)



第5図 袴形本郷家成立時の家系図

（第5図）により明らかであり、これに従うとおりんが誕生して結婚できるのは早くても19世

紀初頭であり、さらに分家となった時には喜助は既に死亡（1810年）していることから、袴形本郷家の成立は、19世紀前半と推定できる。

一方、上記引用文中の「法印無量寺」は、古代出羽国の式内社として延喜式に登場する保呂羽山波宇志別神社に関連する修験寺院（法印とは山伏・祈祷師の意）である。明治初年に廃寺となり、その後袴形神社として改組、明治43年に村社である神明社に合祀され、現存はしない。同寺跡は、実は前項で述べた燈明型の円柱形碑に刻まれた「當寺」を指すことが『大森町郷土史』に記されており、この地に存在していたようである。ここはまさに本郷家墓地に隣接する場であり、分立当初の本郷家が無量寺内に位置していたとすれば、その一角に屋敷墓として造営されたものと解することもできよう。

（3）墓塔の構築時期

上記2点の検討により、蔵骨器の製作年代と袴形本郷家の成立年代には、約100年の差があることが明らかとなった。もちろん大甕の製作年代と蔵骨器として埋設した時期に開きがあることは自明のことであるし、墓塔が袴形本郷家分立に伴い新設されたかについても史料はない。ただ『本郷家七代物語』を読む限りにおいては、袴形本郷家分立の大きな要素として早死にした本家二代目養子の子・孫等の供養をおこなうことが言明されていることから、分立にあたり墓塔が新設・構築されたと見たい。この仮説から導き出される墓塔の構築時期は1810年（喜助死亡年）を上限とする19世紀前半となる。

なお本墓塔については、本家の墓が置かれている長應寺（浄土真宗：大曲市角間川町）の住職大森昌丸氏によると、浄土真宗に特有の形態の墓標であり、実際同寺にも数基の同形・無銘の墓塔が認められる。さらに墓塔に使用された石材については、安山岩のようであり肉眼的観察では、大曲市西部の姫神山を標地とする「姫神山安山岩」（新第三紀中新世末期～鮮新世前期）の可能性が高い。同安山岩は、現在でも大曲市蛭川にて採石が行われており、蛭川石として流通している。

おわりに

墓地の所在する袴形は、近世においては出羽国平鹿郡袴形村として存在し、明治22年に川西村の大字、昭和31年からは大森町の大字として現在に至っている。墓塔が構築されたのは、袴形村と呼ばれていた時代である。蔵骨器として利用された大甕は肥前国内で生産されたもので、おそらく18世紀代に日本海沿岸を航行する北前船に乘せられて運ばれたのであろう。そして土崎湊で一旦陸揚げし、今度は川船に乘せて雄物川を遡行、角間川港を経由して袴形の地にたどり着いたと推測される。角間川は、雄物川の舟運の基地として栄えたところであり、まさに本郷家（本家）が食糧雑貨商として財を成しえた基盤でもある。袴形本郷家分立にあたり墓塔が本家主導で新設されたとすれば、その蔵骨器もまた本家から贈与された大甕であった可能性がある。それは同家の取り扱い商品の一であったのかもしれない。

謝辞 小稿が成るにあたり、墓地の所有者であり蔵骨器の出土を報じていただいた本郷廣氏、陶器の同定を引き受けていただいた大橋康二氏、墓塔・石材についてお教えいただいた大森昌丸氏に感謝の意を表します。

註

1. 秋田県教育委員会『秋田県の中世城館』秋田県文化財調査報告書第86集 1981(昭和56)年 p 313
2. 日野久「平鹿郡大森町劔花、鹿島神社出土の珠洲系陶器」『秋田考古学』第38号 秋田考古学協会
1984(昭和59)年
3. 註1 文献 p 312
4. 秋田県教育委員会「下田遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅳ』秋田県文化財調査報告書第189集
1990(平成2)年
5. 大森町郷土史編さん委員会『大森町郷土史』1981(昭和56)年
6. 紐巻の工程は、窯詰の最終段階のみで行われるのではなく、成形各工程時にも自重による形崩れを防ぐために縄を巻くそうであり、頸部に認められる紐巻の痕は口縁部成・整形に伴う紐巻の可能性もある。
福岡県教育委員会「門田遺跡・辻田地区墓地群の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第9集
1978(昭和53)年 p 148
7. 遮那藤麻呂「日本各地の墳墓 中部・北陸」『新版仏教考古学講座』第7巻 墳墓 雄山閣 1975(昭和50)年
p 132
8. 東中川忠美「肥前における近世の大甕」『東アジアの考古と歴史』下 岡崎敬先生退官記念論集
1987(昭和62)年
9. 註8 文献 p 768
10. 註8 文献 p 750
11. 肥前の大甕は、佐賀県東松浦郡相知町横枕窯での生産が昭和53年で幕を閉じている。
藤口健二「肥前の大甕づくり」『日本民俗文化体系』〔普及版〕第14巻 技術と民俗(下) 小学館
1995(平成7)年 p 468
12. 本郷太郎『本郷家七代物語』私家版 1975(昭和50)年 p 35
13. 註12 文献 p 121
14. 佐藤久治『秋田の社家と神子』秋田真宗研究会 1979(昭和54)年
15. 横手平鹿総合郷土史刊行会「川西村郷土誌」『横手平鹿総合郷土誌』1981(昭和56)年 p 1124
16. 註5 文献 p 878
17. この墓塔は、当然のことながらある程度の財力をもつ家でなければ建立できなかった。時期的な問題もあろうが、墓塔には無銘のものと「南無阿弥陀仏」と彫られているものの両者が存在する。筆者実見。
18. 秋田県『秋田県総合地質図幅 大曲』1978(昭和53)年 p 71~75
19. 今野恭三「蛭川石の記」『秋田民報』1985(昭和60)年2月~4月に連載
20. 新野直吉・遠藤巖編「袴形」『角川日本地名大辞典 秋田県』角川書店 1980(昭和55)年 p 527~528